

表 11-2 家庭内の自分の役割（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	495名 42.9%	209名 12.7%	704名 25.2%	380名 40.9%	260名 16.0%	640名 25.0%	1344名 25.1%
家事(全て)	129 11.2%	1038 63.1%	1167 41.7%	108 11.6%	814 50.1%	922 36.1%	2089 39.0%
家庭菜園	257 22.3%	348 21.2%	605 21.6%	217 23.3%	400 24.6%	617 24.1%	1222 22.8%
庭いじり	234 20.3%	291 17.7%	525 18.8%	202 21.7%	336 20.7%	538 21.1%	1063 19.9%
家事(自分が主だが時に手伝いあり)	56 4.9%	224 13.6%	280 10.0%	47 5.1%	209 12.9%	256 10.0%	536 10.0%
家事(一部)	124 10.8%	77 4.7%	201 7.2%	96 10.3%	141 8.7%	237 9.3%	438 8.2%
留守番	37 3.2%	85 5.2%	122 4.4%	50 5.4%	136 8.4%	186 7.3%	308 5.8%
家族の介護	18 1.6%	36 2.2%	54 1.9%	14 1.5%	27 1.7%	41 1.6%	95 1.8%
その他	36 3.1%	9 0.5%	45 1.6%	21 2.3%	20 1.2%	41 1.6%	86 1.6%
計	1386 120.2%	2317 140.9%	3703 132.3%	1135 122.0%	2343 144.2%	3478 136.1%	7181 134.1%

2. 仕事

仕事の状況は表 12-1 に示すように「仕事をしたいが、していない」は前期 17.9%に対し後期 21.8%、「特に仕事をしたいとは思わない」は前期 17.8%、後期 31.4%であった。両者をあわせて、仕事をしていない人は前期 35.7%から後期で 53.2%へと増えた。

項目別（合計は 100%以上）にみると表 12-2 に示すように前期では「農業」が最も多く 38.0%、次に「自営業」11.2%、「ボランティア的な仕事」4.4%、「パート勤務」4.0%、「常勤の一般の仕事」3.1%であった。

後期では「農業」が最も多く 29.2%、次に「自営業」6.5%、「ボランティア的な仕事」2.6%、「常勤の一般の仕事」1.5%、「パート勤務」0.5%であった。

「農業」は前期 38.0%に対して、後期は

29.2%と低く、他も全て後期で低かった。

男女差について見ると、仕事をしていない人のうち「仕事をしたいがしていない」では、前期の男性 14.7%に対し女性が 20.1%、後期で男性 17.7%対女性 24.2%、同様に「特に仕事をしたいと思わない」についても、前期で男性 13.2%対女性 21.1%、後期も 24.2%対 35.6%と女性が多かった。

一方、「農業」については、前期で男性 42.7%対、女性 34.8%、後期 38.5%対 23.9%と男性が多かった。また、「自営業」でも前期男性 14.7%対女性 8.8%、後期 10.6%対 4.1%と男性が多かった。

以上のように前期高齢者で 6割強、後期高齢者でも 5割弱の人が何らかの仕事をしていることは重要な点である。

表 12-1 仕事の状況 (回答者別)

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
仕事をしたいがして いない	170名 14.7%	330名 20.1%	500名 17.9%	165名 17.7%	393名 24.2%	558名 21.8%	1058名 19.8%
特に仕事をしたいと 思わない	152 13.2%	347 21.1%	499 17.8%	224 24.1%	578 35.6%	802 31.4%	1301 24.3%
農業	453 39.3%	545 33.1%	998 35.7%	333 35.8%	367 22.6%	700 27.4%	1698 31.7%
自営業	156 13.5%	130 7.9%	286 10.2%	77 8.3%	51 3.1%	128 5.0%	414 7.7%
常勤の一般の仕事	44 3.8%	33 2.0%	77 2.8%	9 1.0%	21 1.3%	30 1.2%	107 2.0%
パート勤務	36 3.1%	61 3.7%	97 3.5%	8 0.9%	5 0.3%	13 0.5%	110 2.1%
ボランティア的な仕 事	41 3.6%	59 3.6%	100 3.6%	27 2.9%	28 1.7%	55 2.2%	155 2.9%
その他	32 2.8%	39 2.4%	71 2.5%	16 1.7%	36 2.2%	52 2.0%	123 2.3%
複数回答	42 3.6%	31 1.9%	73 2.6%	28 3.0%	27 1.7%	55 2.2%	128 2.4%
返答なし	27 2.3%	70 4.3%	97 3.5%	43 4.6%	119 7.3%	162 6.3%	259 4.8%
計	1153 100%	1645 100%	2798 100%	930 100%	1625 100%	2555 100%	5353 100%

表 12-2 仕事の状況 (項目別)

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
仕事をしたいがして いない	170名 14.7%	330名 20.1%	500名 17.9%	165名 17.7%	393名 24.2%	558名 21.8%	1058名 19.8%
特に仕事をしたいと 思わない	152 13.2%	347 21.1%	499 17.8%	225 24.2%	579 35.6%	804 31.5%	1303 24.3%
農業	492 42.7%	572 34.8%	1064 38.0%	358 38.5%	388 23.9%	746 29.2%	1810 33.8%
自営業	170 14.7%	144 8.8%	314 11.2%	99 10.6%	66 4.1%	165 6.5%	479 8.9%
ボランティア的な仕 事	54 4.7%	68 4.1%	122 4.4%	32 3.4%	35 2.2%	67 2.6%	189 3.5%
常勤の一般の仕事	51 4.4%	36 2.2%	87 3.1%	12 1.3%	27 1.7%	39 1.5%	126 2.4%
パート勤務	42 3.6%	69 4.2%	111 4.0%	8 0.9%	5 0.3%	13 0.5%	124 2.3%
その他	38 3.3%	41 2.5%	79 2.8%	17 1.8%	42 2.6%	59 2.3%	138 2.6%
計	1169 101.4%	1607 97.7%	2776 99.2%	916 98.5%	1535 94.5%	2451 95.9%	5227 97.6%

3. 趣味・スポーツ

趣味・スポーツの状況については表13に示すように「もともと興味がない」は前期26.4%に対し後期では35.4%と増加していた。「十分にしている」は前期12.6%、後期8.3%、「ある程度している」は42.6%、30.5%、両者を合計すると「趣味・スポーツをしている」人は前期55.1%に対し後期では38.9%と著明に減少していた。

また「したいができない」は15.6%、21.8%と後期で多かった。

男女差について見ると、「十分にしている」は後期の男性が11.6%であるのに対し女性は6.5%と少なかったが、それ以外は大きな差は認められなかった。

趣味やスポーツを行なうことは活発な生活を送り、廃用症候群を予防・改善する上で重要である。その点、「したいができない」人が約2割いることは注目すべきであり、趣味やスポーツができるような環境をつくる地域の活性化が望まれるところである。

IV. 「心身機能」の状況

1. 体や心の動きの不自由

体や心の働きで不自由と感じている状況については、表14-1に示すように「特になし」は前期83.4%に対し後期では63.4%と少なくなっている。すなわち、なんらかの不自由のある人が前期で約16%、後期で約37%いることになる。複数の不自由を示す人は前期で4.6%、後期で13.7%であった。

項目別では、表14-2に示すように、不自由があるのは前期では「足の動き」が最も多く9.4%、次に「手の動き」3.5%、「ものを見ること」3.0%、「音を聞くこと」2.8%、「声を出して話すこと」0.8%であった。

後期でも、「足の動き」が最も多く22.9%、次に「音を聞くこと」9.2%、「手の動き」7.5%と2・3位は前期と逆転した。4位は前期と同じ「ものを見ること」7.2%で、次いで前期では0.4%であった「認知症」が2.0%いた。

男女差についてみると、「特になし」を全数から引いた「何らかの不自由のある人」は後期の男性32.8%に対し女性が39.2%で女性でやや多く、また「足の動き」の不自由も後期の男性17.7%に対し女性は25.8%と女性で多かった。

表13 趣味・スポーツについて

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
もともと興味がない	304名 26.4%	435名 26.4%	739名 26.4%	310名 33.3%	595名 36.6%	905名 35.4%	1644名 30.7%
十分にしている	168 14.6%	184 11.2%	352 12.6%	108 11.6%	105 6.5%	213 8.3%	565 10.6%
ある程度している	502 43.5%	689 41.9%	1191 42.6%	305 32.8%	475 29.2%	780 30.5%	1971 36.8%
したいができない	156 13.5%	281 17.1%	437 15.6%	176 18.9%	382 23.5%	558 21.8%	995 18.6%
返答なし	23 2.0%	56 3.4%	79 2.8%	31 3.3%	68 4.2%	99 3.9%	178 3.3%
計	1153 100%	1645 100%	2798 100%	930 100%	1625 100%	2555 100%	5353 100%

表 14-1 体や心の動きで不自由と感じている状況（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	965名 83.7%	1368名 83.2%	2333名 83.4%	629名 67.6%	990名 60.9%	1619名 63.4%	3952名 73.8%
手の動き	10 0.9%	13 0.8%	23 0.8%	15 1.6%	24 1.5%	39 1.5%	62 1.2%
足の動き	57 4.9%	106 6.4%	163 5.8%	78 8.4%	227 14.0%	305 11.9%	468 8.7%
ものを見ること	19 1.6%	23 1.4%	42 1.5%	15 1.6%	32 2.0%	47 1.8%	89 1.7%
音を聞くこと	28 2.4%	12 0.7%	40 1.4%	38 4.1%	46 2.8%	84 3.3%	124 2.3%
声を出して話すこと	0 0.0%	6 0.4%	6 0.2%	5 0.5%	7 0.4%	12 0.5%	18 0.3%
意識障害	0 0.0%	3 0.2%	3 0.1%	3 0.3%	1 0.1%	4 0.2%	7 0.1%
認知症	2 0.2%	2 0.1%	4 0.1%	2 0.2%	9 0.6%	11 0.4%	15 0.3%
失禁	2 0.2%	4 0.2%	6 0.2%	0 0.0%	8 0.5%	8 0.3%	14 0.3%
その他	6 0.5%	3 0.2%	9 0.3%	7 0.8%	10 0.6%	17 0.7%	26 0.5%
複数回答	56 4.9%	73 4.4%	129 4.6%	115 12.4%	235 14.5%	350 13.7%	479 8.9%
返答なし	8 0.7%	32 1.9%	40 1.4%	23 2.5%	36 2.2%	59 2.3%	99 1.8%
計	1153 100%	1645 100%	2798 100%	930 100%	1625 100%	2555 100%	5353 100%

表 14-2 体や心の動きで不自由と感じている状況（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	965名 83.7%	1368名 83.2%	2333名 83.4%	629名 67.6%	990名 60.9%	1619名 63.4%	3952名 73.8%
足の動き	97 8.4%	165 10.0%	262 9.4%	165 17.7%	420 25.8%	585 22.9%	847 15.8%
音を聞くこと	50 4.3%	27 1.6%	77 2.8%	87 9.4%	149 9.2%	236 9.2%	313 5.8%
手の動き	39 3.4%	60 3.6%	99 3.5%	68 7.3%	123 7.6%	191 7.5%	290 5.4%
ものを見ること	44 3.8%	41 2.5%	85 3.0%	60 6.5%	124 7.6%	184 7.2%	269 5.0%
声を出して話すこと	10 0.9%	13 0.8%	23 0.8%	18 1.9%	20 1.2%	38 1.5%	61 1.1%
認知症	6 0.5%	4 0.2%	10 0.4%	23 2.5%	27 1.7%	50 2.0%	60 1.1%
失禁	4 0.3%	11 0.7%	15 0.5%	14 1.5%	32 2.0%	46 1.8%	61 1.1%
意識障害	6 0.5%	6 0.4%	12 0.4%	16 1.7%	10 0.6%	26 1.0%	38 0.7%
その他	8 0.7%	7 0.4%	15 0.5%	13 1.4%	27 1.7%	40 1.6%	55 1.0%
計	1229 106.6%	1702 103.5%	2931 105.9%	1093 117.5%	1922 118.3%	3015 118.0%	5946 111.1%

V. 健康状態

「健康状態」(疾患・外傷、等)をみるために通院・入院歴の状況を調べた。

1. 通院

医療施設への通院の状況は表 15 に示すように「(通院)あり」は前期 55.2%に対し後期では 69.5%と多かった。

男女差について見ると、「なし」は後期で男性が 33.8%に対し、女性は 26.6%と少なかった。

このように前期で 5.5 割、後期で 7 割が通院していることは、「水際作戦」(生活機能低下の早期発見・早期対応)としての訪問リハビリテーションにおいて重要な意味をもつ。

すなわち生活機能低下の早期発見者として病院・診療所などの医療機関の役割が重要だということである。

2. 入院

これまでの入院状況については表 16 に示すように「なし」は前期 60.9%に対し後期では 49.3%であり、これと「返答なし」を除いた「入院あり」の合計は前期で 37.5%、後期で 48.9%と、後期高齢者で入院の既往が半数とかなり多かった。「1年以内にあり」は前期 9.3%に対し後期 13.7%と多く、「1～5年にあり」は前期 12.7%、後期 18.0%と両者をあわせて後期では 3 割強である。入院そのもの

表 15 医療施設への通院の状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
なし	526名 45.6%	709名 43.1%	1235名 44.1%	314名 33.8%	433名 26.6%	747名 29.2%	1982名 37.0%
あり	622 53.9%	922 56.0%	1544 55.2%	603 64.8%	1174 72.2%	1777 69.5%	3321 62.0%
返答なし	5 0.4%	14 0.9%	19 0.7%	13 1.4%	18 1.1%	31 1.2%	50 0.9%
計	1153 100%	1645 100%	2798 100%	930 100%	1625 100%	2555 100%	5353 100%

表 16 これまでの入院状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
なし	638名 55.3%	1066名 64.8%	1704名 60.9%	438名 47.1%	821名 50.5%	1259名 49.3%	2963名 55.4%
1年以内にあり	130 11.3%	129 7.8%	259 9.3%	145 15.6%	205 12.6%	350 13.7%	609 11.4%
1～5年にあり	177 15.4%	179 10.9%	356 12.7%	180 19.4%	280 17.2%	460 18.0%	816 15.2%
最近5年間はない	186 16.1%	249 15.1%	435 15.5%	149 16.0%	291 17.9%	440 17.2%	875 16.3%
返答なし	22 1.9%	22 1.3%	44 1.6%	18 1.9%	28 1.7%	46 1.8%	90 1.7%
計	1153 100%	1645 100%	2798 100%	930 100%	1625 100%	2555 100%	5353 100%

に伴う安静や入院の原因となった疾患を誘因として廃用症候群を生じる危険があるため、このように入院者が多い現状からは、入院時の廃用症候群についての啓発が必要である。

「最近5年間はない」は前期 15.5%、後期 17.2%であった。

男女差について見ると、「なし」は前期男性 55.3%に対し女性は 64.8%と女性で多かった。

V. 「環境因子」の状況

1. 補装具等の使用状況

補装具等の使用状況については回答者別を表 18-1 に、項目別を表 18-2 に示した。「使

用なし」が前期 96.4%、と後期 85.3%と非常に多かった。逆に使用しているものは前期 3.6%、後期 14.6%と後期で多かった。

個別には「補聴器」が最も多く、前期 2.5%、後期 6.8%で用いていた。次いで「オムツ」は前期 0.1%、後期 1.1%、「ポータブルトイレ」は前期 0.2%、後期 1.1%の順であり、いずれも後期高齢者の使用者が多かった。

先にみたように屋外歩行が自立していない人が決して少なくないにもかかわらず、歩行補助具（杖、シルバーカーなど）を使っている人はいなかった。

表 18-1 補装具等の状況（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
補聴器	42名 3.6%	27名 1.6%	69名 2.5%	86名 9.2%	89名 5.5%	175名 6.8%	244名 4.6%
白杖	1 0.1%	2 0.1%	3 0.1%	5 0.5%	22 1.4%	27 1.1%	30 0.6%
装具	1 0.1%	0 0.0%	1 0.0%	1 0.1%	5 0.3%	6 0.2%	7 0.1%
電動三輪車	2 0.2%	6 0.4%	8 0.3%	8 0.9%	28 1.7%	36 1.4%	44 0.8%
しびん	2 0.2%	2 0.1%	4 0.1%	15 1.6%	7 0.4%	22 0.9%	26 0.5%
オムツ	1 0.1%	3 0.2%	4 0.1%	8 0.9%	19 1.2%	27 1.1%	31 0.6%
ポータブルトイレ	0 0.0%	5 0.3%	5 0.2%	3 0.3%	25 1.5%	28 1.1%	33 0.6%
電動車いす	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.1%	2 0.1%	2 0.0%
複数回答	3 0.3%	3 0.2%	6 0.2%	21 2.3%	31 1.9%	52 2.0%	58 1.1%
使用なし	1101 95.5%	1597 97.1%	2698 96.4%	782 84.1%	1398 86.0%	2180 85.3%	4878 91.1%
計	1153 100%	1645 100%	2798 100%	930 100%	1625 100%	2555 100%	5353 100%

表 18-2 補装具等の状況（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
補聴器	42名 3.6%	28名 1.7%	70名 2.5%	96名 10.3%	101名 6.2%	197名 7.7%	267名 5.0%
オムツ	3 0.3%	4 0.2%	7 0.3%	16 1.7%	35 2.2%	51 2.0%	58 1.1%
ポータブルトイレ	0 0.0%	6 0.4%	6 0.2%	10 1.1%	40 2.5%	50 2.0%	56 1.0%
電動三輪車	2 0.2%	7 0.4%	9 0.3%	13 1.4%	33 2.0%	46 1.8%	55 1.0%
白杖	1 0.1%	3 0.2%	4 0.1%	10 1.1%	32 2.0%	42 1.6%	46 0.9%
しびん	5 0.4%	2 0.1%	7 0.3%	27 2.9%	11 0.7%	38 1.5%	45 0.8%
装具	2 0.2%	1 0.1%	3 0.1%	1 0.1%	8 0.5%	9 0.4%	12 0.2%
電動車いす	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 0.3%	2 0.1%	5 0.2%	5 0.1%
計	55 4.8%	51 3.1%	106 3.8%	176 18.9%	262 16.1%	438 17.1%	544 10.2%

D. 総括的考察

以上、在宅非要介護認定高齢者（身体障害者手帳非所持者）の生活機能の現状をみると、ふつう「健康」で「自立」していると思われがちなこのような高齢者でも、「活動」「参加」「心身機能」に問題をもっている人が決して少なくないこと、それが特に後期高齢者に多いことがわかる。また「健康状態」に関連して現在通院していたり、入院歴を持つ人もかなりあり、やはり後期高齢者に多かった。

特に「活動」において、「普遍的自立」と「環境限定型自立」を分けてみることにより、一見「自立」しているようにみえても「普遍的自立」に達しえず「環境限定型自

立」にとどまる者が少なくないことが確認された。このような限定された自立状態は、訪問リハビリテーションを必要とするような「非自立」に転落する危険の大きい状態であり、いわば訪問リハビリテーション必要者の「予備軍」であるということができる。

これは予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているか、今後必要とする可能性の大きい「ハイリスク」群に属するかするものが、このようなふつう「健康」で「自立」していると思われがちな一般高齢者にも少なからず存在していることを意味している。

なお「活動」において外出目的・外出手

段その他、また「参加」の多くの項目には男女差がみられた。

E. 結論

1 地方都市の在宅高齢者の I C F にもとづく生活機能の調査により、普通「健康で自立している」と考えられがちな一般の高齢者においても、意外に多くのものが「活動」「参加」「心身機能」に問題を有しており、予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているか、今後必要とする可能性をもつと考えられることが確認され、今後の訪問リハビリテーション・システムの構築のための貴重な情報が得られた。

F. 健康危険情報

特になし

在宅非要介護認定・身体障害者手帳所持高齢者の生活機能 —訪問リハビリテーション・システム構築のために—

主任研究者 大川 弥生 国立長寿医療センター 研究所 部長

研究要旨 厚生労働省老健局高齢者リハビリテーション研究会報告書の指摘するような、独自のメリットをもつ訪問リハビリテーションの効果的なプログラムの確立を目的として、また従来「非要介護認定高齢者」として同質のものとして扱われがちだったが独自の課題をもっと考えられる、身体障害者手帳を有する非要介護認定高齢者における生活機能の特徴を把握するために、中山間部地域の1市において、ICF（WHO国際生活機能分類）にもとづく生活機能調査を行った。

対象は65才以上の在宅生活の非要介護認定高齢者全員のうち入院・入所者を除き、身体障害者手帳を所持する者590名（回収率96.3%）で、前期高齢者250名（男性144名、女性106名）、後期高齢者340名（男性181名、女性159名）であった。

その結果、介護を必要とせず、一応「自立」しているはずの非要介護認定高齢者の中でも身体障害者手帳所持者は、同手帳非所持の者よりもはるかに多く「活動」「参加」「心身機能」に問題を有していることが判明した。すなわちこの群には、予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているものが少なくなく、また今後必要とする可能性が高いものがかなりの程度にみられるのであり、今後の訪問リハビリテーション・システムの構築の上でそのような特徴に十分な注意を払うことが必要と考えられた。

A. 研究目的

厚生労働省老健局高齢者リハビリテーション研究会の報告書「高齢者リハビリテーションのあるべき方向」（平成16年1月）は、高齢者のリハビリテーション全般について、種々の問題提起と建設的な提言を行なっており、中でも訪問リハビリテーションについては「訪問リハビリテーションの目的は、在宅

という現実の生活の場で日常生活活動の自立と社会参加の向上を図ることであり、高齢者本人と自宅環境との適合を調整する役割を持ち、自宅での自立支援の効果的なサービスである」と述べている。

これは従来の訪問リハビリテーションが、「心身機能」の「維持」を目的とする「維持期のリハビリテーション」という位置づけに

なりがちで、しかも本来ならば外来あるいは通所リハビリテーションに通うべきものが、重度であるためにそれが不可能な場合に「やむを得ず」訪問で行なうものと考えられがちであったことからの大きな転換である。すなわち訪問リハビリテーションは、訪問でなければ実現できないような独自の大きなメリットをもつものと位置づけられたことを意味している。

我々はこのような方向での訪問リハビリテーションの構築のために、対象となる在宅生活者の生活機能の実態を把握することが重要と考え、これまで各種の高齢者の生活機能の実態をICF（WHO 国際生活機能分類）にもとづいて調査してきた。

その中で、我々は介護保険サービスの立場からは「非要介護認定者」ということであたかも同質のものであるかのように扱われがちな集団を、生活機能の観点からは2つに分ける必要があるのではないかと考えるに到った。すなわち身体障害者福祉法による障害認定を受け、身体障害者手帳を有する群と、障害認定を受けず身体障害者手帳を有しない群の2つである。「身体障害者手帳」を有する群は、介護を必要とするような状態（「活動」の低下）にはないが、身体障害者手帳交付の対象となるだけの「心身機能」の低下を有するものであり、それが「活動」「参加」などの、「生活機能」の他のレベルに悪影響を及ぼしていることが十分考えられるからである。

本報告書では、このような視点から、要介護認定を受けていないが、身体障害者手帳の交付を受けている在宅高齢者についての分析を行なった。

B. 研究方法

1. 調査方法及び対象

1市の65才以上の在宅生活の非要介護認定者全約6,400名から入院・入所者を除く6,193名を対象として調査を行ない、回答は5,961名（回収率96.3%）から得た。このうち身体障害者手帳を所持している590名（平均年齢76.3±6.7才）を対象に分析した。内訳は前期高齢者（65-74歳）250名（男性144名、女性106名）、後期高齢者（75歳～）340名（男性181名、女性159名）であった。

調査は、郵送留め置き訪問回収法により行った。

調査項目は、WHO・ICFモデルに基づき生活機能の3つのレベルのうち、「活動」「参加」に重点をおき、また健康状態、環境因子についても調査した。

「活動」については、自立度（「活動」の「質」）と生活の活発さ（「活動」の「量」）の両面から調査した。これはこれらの「質」と「量」とを「掛け合わせ」たものが全体としての「生活の活発性」であり、それが低下することが「廃用症候群」を引き起こし、生活機能全般の低下に及ぶことがしばしばみられ、その改善が訪問リハビリテーションの重要な課題であるからである。

（倫理面の配慮）

主任研究者の所属機関の倫理委員会にて審査を受け、研究の承認を受けた。また当該自治体の個人情報保護・管理等の規則に従い、本研究について主任研究者との間で協定書を締結している。

なお対象となる被検者についてはインフォームド・コンセントの原則に立って実施

している。

C. 結果と考察

以下、「活動」、「参加」、「健康状態」、「環境因子」、そして介護予防上重視されている廃用症候群と関連深い「活動」の「量」的側面である「生活の活発さ」について、前期高齢者・後期高齢者にわけ、その中で男女に分けて検討した。

I. 活動の状況(1) 自立度－「活動」の「質」

1. 歩行・移動

1) 屋外歩行

屋外歩行の状況は、表1に示すように「普遍的自立」である「遠くへも一人で歩いている」は前期高齢者では250名中79名(31.6%)、後期高齢者では340名中99名(29.1%)とともに3割前後であった。「環境限定型自立」である「近くであれば一人で歩いている」は前期50.0%、後期44.7%であり、両者をあわせた「自立者計」は前期81.6%、後期73.8%で、後期でやや低い傾向があった。

これに対し「誰か一緒であれば歩いている」

は前期6.8%、後期9.1%、「外は歩いていない」は前期11.2%、後期16.5%、両者を合計した「非自立者計」は前期で18.0%、後期で25.6であった。

男女差で見ると、「遠くへも一人で歩いている」は前期の男性36.1%に対し女性が25.5%と少なく、同様に後期の男性33.7%に対し女性が23.9%と少なかった。一方、「近くであれば一人で歩いている」は前期の男性47.9%対し女性が52.8%と多く、同様に、後期の男性40.9%に対し女性は49.1%と多かった。そのため「遠くへも一人で歩いている」と「近くであれば一人で歩いている」とを合計した「自立計」は前期では男性84.0%、女性78.3%、後期では74.6%対73.0%と差は縮まった。

すなわち他報告(「在宅非要介護認定・身体障害者手帳非所持高齢者の生活機能」)で検討した、非要介護認定・身体障害者手帳非所持高齢者の場合と違って、「普遍的自立」と「環境限定型自立」とを分けることによって明瞭になるのはこの場合、年齢層差ではなく男女差であるということがいえる。

表1 屋外歩行

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
遠くへも一人で歩いている	52名 36.1%	27名 25.5%	79名 31.6%	61名 33.7%	38名 23.9%	99名 29.1%	178名 30.2%
近くであれば1人で歩いている	69 47.9%	56 52.8%	125 50.0%	74 40.9%	78 49.1%	152 44.7%	277 46.9%
誰か一緒であれば歩いている	8 5.6%	9 8.5%	17 6.8%	16 8.8%	15 9.4%	31 9.1%	48 8.1%
外は歩いていない	14 9.7%	14 13.2%	28 11.2%	28 15.5%	28 17.6%	56 16.5%	84 14.2%
返答なし	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	2 1.1%	0 0.0%	2 0.6%	3 0.5%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

しかしいずれにせよ、「自立」をこのように分けることが「活動」の「質」の低下を敏感に検知するのに有意義であることはここでも確認されたといつてよい。

以上をまとめると、要介護認定をうけていないが、身体障害者手帳を有する在宅高齢者では、屋外歩行が非自立であるものが既に2割前後あり、更に「潜在的非自立」とみることもできる「環境限定型自立」にとどまるものが5割近かった。すなわち「普遍的自立」のレベルにある者は僅か3割であった。これを同一自治体の「身体障害者手帳」をもたない非要介護認定高齢者で、「普遍的自立」が前期で6割弱、後期で3割強であったことと比べると、ちょうどこの「身体障害者手帳」所持群では、前期・後期とも非所持群の後期よりやや低い状態にまで低下しているということができよう。

2) 自宅内歩行

自宅内歩行の状況は、表2に示すように「普遍的自立」に準ずる「何もつかまらずに歩い

ている」は前期74.8%に対し後期では62.6%で後期が低く、それに対して「環境限定型自立」に準ずる「よく家具や壁をつたわっている」は前期16.8%、後期25.6%と逆に後期で高かった。そのため両者を合計した「自立計」はすると前期91.6%、後期88.2%とほとんど差がなくなった。

「誰かと一緒に歩いている」は前期5.2%、後期5.9%、「ほとんど四つ這いなど」は前期1.6%、後期1.8%、「ほとんどベッドや布団の上の生活」は前期1.6%、後期3.8%であり、これらを合計した「非自立者計」は前期8.4%、後期11.5%であった。

ここでは「普遍的自立」と「環境限定型自立」との差を明確にすることで、年齢層による「活動」の低下を鋭敏に検知することができた。

なお男女差で見ると、「何もつかまらずに歩いている」は、前期で男性77.1%に対し女性71.7%、後期で男性が65.7%対女性59.1%と男性で多かった。

表2 自宅内歩行

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
何もつかまらずに歩いている	111名 77.1%	76名 71.7%	187名 74.8%	119名 65.7%	94名 59.1%	213名 62.6%	400名 67.8%
よく家具や壁をつたわっている	22 15.3%	20 18.9%	42 16.8%	43 23.8%	44 27.7%	87 25.6%	129 21.9%
誰かと一緒に歩いている	6 4.2%	7 6.6%	13 5.2%	12 6.6%	8 5.0%	20 5.9%	33 5.6%
ほとんど四つ這いなど	2 1.4%	2 1.9%	4 1.6%	1 0.6%	5 3.1%	6 1.8%	10 1.7%
ほとんどベッドや布団の上の生活	3 2.1%	1 0.9%	4 1.6%	6 3.3%	7 4.4%	13 3.8%	17 2.9%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%	1 0.3%	1 0.2%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

このように要介護認定は受けていないが、身体障害者手帳を有する在宅高齢者では、すでに自宅内歩行が自立していない、あきらかな生活機能低下を示すものが1割前後おり、それに加えて「よく家具や壁をつたわっている」という、「環境限定型自立」の状態にあるハイリスク群が2,3割存在することが注目される。

これを別報告の「身体障害者手帳」非所持者と比較すると、非所持者では「非自立計」は1~4.4%、「環境限定型自立」が8~18%であったのに比べ本群では明らかに増加している。

3) 畳や床からの立ち上がり

和式生活での必要性の高い畳や床からの立ち上がり状況は、表3に示すように、「普遍的自立」に準ずる「不自由はない」は前期60.0%に対し後期では45.9%と後期高齢者で低いが、「環境限定型自立」に準ずる「床や家具に手をついている」は34.8%、45.9%と後期で高く、そのため両者を合計した「自立者計」

としては、前期94.8%、後期91.8%とほとんど差がなかった。

このようにここでも「普遍的自立」と「環境限定型自立」との差を明確にすることで、比較的軽度な「活動」の低下も鋭敏に検知することができていた。

次に非自立者である「助けてもらっている」は2.0%、5.3%、「行っていない」は2.8%、2.9%であり、「非自立者計」は前期4.8%、後期8.2%であった。

男女差でみると「不自由はない」は、前期で男性が68.1%に対し女性で49.1%、後期で男性54.7%対女性35.8%と男性で多かったのに対し、「床や家具に手をついている」では前期で男性が26.4%に対し女性46.2%、後期で男性37.0%対女性56.0%と女性で多かった。ここでも「不自由はない」と「床や家具に手をついている」を合計すると前期では男性94.4%対女性95.3%、後期では91.7%、91.8%とまったく差はなくなった。ここでもこの2つを分けることが男女差を鋭敏に検出するのに役立っていることがわかる。

表3 畳や床からの立ち上がりの状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
不自由ない	98名 68.1%	52名 49.1%	150名 60.0%	99名 54.7%	57名 35.8%	156名 45.9%	306名 51.9%
床や家具に手をついている	38 26.4%	49 46.2%	87 34.8%	67 37.0%	89 56.0%	156 45.9%	243 41.2%
助けてもらっている	2 1.4%	3 2.8%	5 2.0%	12 6.6%	6 3.8%	18 5.3%	23 3.9%
行っていない	5 3.5%	2 1.9%	7 2.8%	3 1.7%	7 4.4%	10 2.9%	17 2.9%
返答なし	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

別に報告した、同一自治体の「身体障害者手帳非所持」の群と比較すると、「非自立計」は「非所持」では1~3%だったものがこの「所持」群では5~8%と明らかに多い。また「床や家具に手をつけている」は「非所持」では1~3割強であったのに対し、「所持」群では4割前後とこれも明らかに多い。

また身体障害者手帳所持高齢者では、床や家具に手をつけて行っている人が3~4割いることは興味深い知見で、実生活での方法として実用的な手段であることが再確認された。このような床や家具に手をつく方法は本人が一人で工夫して行っている場合が多いが、訪問リハビリテーションでは意識的に自立のための手段として訓練をすすめる必要がある場合も多いと考えられる。

2. 日常生活行為（身の回り行為）

いわゆるADL（日常生活行為）のうち、前節で検討した起居・移動を除く身の回りの生活行為（セルフケア）についてここで述べる。

1) 身の回りのことで少しでも不自由なこと
身の回りのことで少しでも不自由な行為については、表4に示すように「あり」は前期17.6%に対し後期では23.2%と、後期でやや多かった。すなわち前期・後期とも2割前後に何らかの不自由な行為があった。

他報告と比較すると、「身体障害者手帳非所持」群では、この「あり」は前期3%、後期10.9%であり、それに比べるとこの「手帳所持」群では2倍から6倍多かった。

2) 身の回りのことで人に助けられていること

身の回りのことで人に助けられている行為は、表5に示すように「あり」は前期では7.6%で、後期でも7.6%と全く同じであった。男女別前期高齢者・後期高齢者の内訳を表5に示す。

「身体障害者手帳非所持」群では「あり」は前期で1%、後期で約3%であったのと比べると2~8倍多かった。

表4 身の回りのことで少しでも不自由なこと

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
あり	24名 16.7%	20名 18.9%	44名 17.6%	46名 25.4%	33名 20.8%	79名 23.2%	123名 20.8%
なし	120 83.3%	86 81.1%	206 82.4%	135 74.6%	126 79.2%	261 76.8%	467 79.2%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表5 身の回りのことで人に助けられていること

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
あり	11名 7.6%	8名 7.5%	19名 7.6%	12名 6.6%	14名 8.8%	26名 7.6%	45名 7.6%
なし	133 92.4%	98 92.5%	231 92.4%	169 93.4%	145 91.2%	314 92.4%	545 92.4%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

3) 靴下を履く状況

身の回りの行為の中でも立って靴下を履くことは特に難しい場合が多いので、特別に調査した。

靴下を履く状況は、表6に示すように「もたれずにしている」は前期33.6%に対し後期では25.9%、「もたれてしている」は16.0%、14.4%、「座ってしている」は46.8%、53.2%であり、「自立者計」は前期96.4%、後期93.5%であった。すなわち前2者は後期で低く、後期では「座ってしている」者が多く半数以上であった

一方「はかせてもらっている」は3.6%、6.5%であった。

男女差については「もたれてしている」は前期で男性が12.5%であったのに対し女性が20.8%と多く、一方「座ってしている」は男性で49.3%に対し女性で43.4%と少なかった。

このようにここでも「普遍的自立」と「環境限定型自立」との差を明確にすることが有効であった。

別研究の「身体障害者手帳非所持」群では「はかせてもらっている」は前期は0.3%、後期で1.4%と非常に少なかったため、その約5~10倍となる。また「もたれてしている」は「非所持」では前期10.4%、後期16.2%であったが、それに比べるとこの「所持」群では1.5倍程度多かった。

II. 「活動」の状況(2): 生活の活発さー「活動」の「量」

活発な生活を送ることは廃用症候群を予防し、生活機能の低下を予防する上で重要である。そのため種々の角度から「生活の活発さ」を調べた。

1. 一日の活動量

一日の活動状況は表7に示すように「よく動いている」は前期59.6%に対し、後期では48.5%、「座って過ごすことが多い」は30.4%、35.6%、「日中も横になっていることが多い」は6.4%、10.0%、「ほとんど横になっている」は2.8%、5.3%であった。

表6 靴下を履く状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
もたれずにしている	49名 34.0%	35名 33.0%	84名 33.6%	47名 26.0%	41名 25.8%	88名 25.9%	172名 29.2%
もたれてしている	18 12.5%	22 20.8%	40 16.0%	24 13.3%	25 15.7%	49 14.4%	89 15.1%
座ってしている	71 49.3%	46 43.4%	117 46.8%	96 53.0%	85 53.5%	181 53.2%	298 50.5%
はかせてもらっている	6 4.2%	3 2.8%	9 3.6%	14 7.7%	8 5.0%	22 6.5%	31 5.3%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

「よく動いている」は後期では少なく、一方「座って過ごすことが多い」は後期が多かった。そのためこの2つを合計すると、前期は90.0%、後期は84.1%と差が縮まった。

男女差については「よく動いている」が前期で男性64.6%に対し女性で52.8%で少なく、「座って過ごすことが多い」が前期で男性25.7%に対し女性36.8%と多かった。

「手帳非所持」群では「よく動いている」は前期で86.2%、後期で65.4%であったので、この「所持」群では明らかに少なく、7割程度であった。また「日中も横になっているこ

とが多い」と「ほとんど横になっている」をあわせたものは「非所持者」では前期2.5%、後期9.6%であったが、この「所持群」では9.2%、15.3%であり、2~3倍多かった。

2. 外出頻度・目的・手段

1) 外出頻度

外出頻度の状況は、表8に示すように「週4回以上」は前期40.4%に対し後期では30.6%、「週2~3回」は28.0%、23.8%、「週1回」は8.4%、14.4%であり、以上を合計して週1回以上は前期76.8%、後期68.8%であった。

表7 一日の活動状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
よく動いている	93名 64.6%	56名 52.8%	149名 59.6%	91名 50.3%	74名 46.5%	165名 48.5%	314名 53.2%
座って過ごすことが多い	37 25.7%	39 36.8%	76 30.4%	62 34.3%	59 37.1%	121 35.6%	197 33.4%
日中も横になっていることが多い	8 5.6%	8 7.5%	16 6.4%	18 9.9%	16 10.1%	34 10.0%	50 8.5%
ほとんど横になっている	4 2.8%	3 2.8%	7 2.8%	9 5.0%	9 5.7%	18 5.3%	25 4.2%
返答なし	2 1.4%	0 0.0%	2 0.8%	1 0.6%	1 0.6%	2 0.6%	4 0.7%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表8 外出頻度

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
週4回以上	66名 45.8%	35名 33.0%	101名 40.4%	71名 39.2%	33名 20.8%	104名 30.6%	205名 34.7%
週2~3回	40 27.8%	30 28.3%	70 28.0%	40 22.1%	41 25.8%	81 23.8%	151 25.6%
週1回	8 5.6%	13 12.3%	21 8.4%	23 12.7%	26 16.4%	49 14.4%	70 11.9%
月1~3回	17 11.8%	19 17.9%	36 14.4%	26 14.4%	41 25.8%	67 19.7%	103 17.5%
ほとんどなし	13 9.0%	9 8.5%	22 8.8%	20 11.0%	18 11.3%	38 11.2%	60 10.2%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%	0 0.0%	1 0.3%	1 0.2%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

次いで「月1～3回」は14.4%、19.7%、「ほとんどなし」は8.8%、11.2%であった。

「週4回以上」は前期40.4%に対し後期では30.6%と少なく、一方「週1回」は前期8.4%に対し後期14.4%、「月1～3回」は前期14.4%対後期19.7%と後期で多かった。

男女差について見ると、「週4回以上」は前期の男性が45.8%であったのに対し女性は33.0%、後期で男性39.2%対女性20.8%と少なかった。一方、「週1回」は後期の男性12.7%に対して、女性は16.4%、「月1～3回」は前期で男性11.8%対女性17.9%、後期の男性14.4%対女性25.8%と女性が多かった。

「手帳非所持」群では「週4回以上」が前期5.5割、後期3.5割であり、この「所持」群は4割、3割とやや低い。逆に「ほとんどなし」は「非所持」群で2.1%、7.6%であったものが「所持」群では8.8%、11.2%と明らかに高い。

以上のように「生活の活発さ」を「一日の活動量」と「外出頻度」の両面からみると、ともに前期より後期で低く、男性よりも女性で低い。また「手帳非所持」群と比べると、あらゆる面で「生活の活発さ」はかなりの程度に低下していた。

2) 外出目的

外出の頻度と関係深いこととして外出の目的をみた。

表9-1に示すように「外出していない」は前期4.4%に対し後期では5.9%であった。表9-1で示すように単独回答で最も多かったのは前期・後期ともに「病院・医院への通院」であり前期12.0%、後期15.0%であった。こ

れはこれらの人々は通院以外には外出していないことを示している。なお「手帳非所持」群ではこれは前期2.9%、後期8.1%であり、やはりこの「手帳所持」群においてかなり多い。

複数回答が多いため、次に項目別の回答(合計は100%以上)をみると表9-2に示すように、前期では「病院・医院への通院」が最も多く71.6%、次に「買い物」60.0%、「畑作業」36.4%、「散歩」36.0%、「友人宅」28.4%であった。

後期で「病院・医院への通院」が最も多く71.5%、次に「買い物」55.0%、「畑作業」34.7%、「散歩」30.6%、「友人宅」25.9%であった。

「買い物」は前期60.0%に対して、後期は55.0%、「散歩」は前期36.0%対30.6%で前期で多かった。一方「老人クラブ」では前期7.2%に対し、後期で15.9%と多かった。

このようにこの群では前期・後期とも「通院」が最も多かったが、「手帳非所持」群では、前期では「買い物」73.4%、ついで「通院」50.2%、「畑作業」48.3%であり、後期では「通院」66.6%、「買い物」64.9%、「畑作業」40.2%等であった。このように外出の目的においても「手帳非所持」群と比べるとこの「所持」群では「通院」といった消極的なものが多く、「畑作業」などの積極的なものが少ない傾向があった。

ただ逆に言えば「身体障害者手帳」を有する、いわば「高齢障害者」であっても、この群のように要介護認定を受けていないものに限れば、「外出していない」ものは少なく、外出目的はまだかなり多彩である。例えば、項目別の総計などのサブグループでも300%前後であることから、一人平均3個の外出目

的をもっているということが出来る、等である。ただし、「手帳非所持」群では項目別の総計は 320%～360%で、やはり当群より 1～2割多かった。

男女差を見ると、「買い物」は前期で男性 54.9%に対し女性は 67.0%、後期で男性 48.1%対女性 62.9%、「友人宅」は前期で男性 23.6%対女性 34.9%、後期で男性 22.1%対女性 30.2%、「親類宅」は前期で男性 22.2%

対女性 28.3%、「病院・医院への通院」は前期で男性が 66.7%対女性 78.3%、後期で男性 68.0%対女性 75.5%といずれも女性で多かった。

一方「畑作業」は前期の男性が 41.7%に対し女性は 29.2%、「趣味・スポーツのため」は前期の男性が 18.8%対女性 7.5%、後期で男性 17.1%対女性 9.4%と男性で多かった。

表 9-1 外出目的（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
外出していない	6名 4.2%	5名 4.7%	11名 4.4%	10名 5.5%	10名 6.3%	20名 5.9%	31名 5.3%
買い物	4 2.8%	1 0.9%	5 2.0%	2 1.1%	2 1.3%	4 1.2%	9 1.5%
友人宅	3 2.1%	1 0.9%	4 1.6%	0 0.0%	2 1.3%	2 0.6%	6 1.0%
親類宅	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	1 0.6%	1 0.3%	2 0.3%
病院・医院への通院	15 10.4%	15 14.2%	30 12.0%	30 16.6%	21 13.2%	51 15.0%	81 13.7%
散歩	5 3.5%	0 0.0%	5 2.0%	2 1.1%	4 2.5%	6 1.8%	11 1.9%
畑作業	4 2.8%	1 0.9%	5 2.0%	3 1.7%	2 1.3%	5 1.5%	10 1.7%
仕事(通勤など)	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
趣味・スポーツのため	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	2 1.1%	0 0.0%	2 0.6%	3 0.5%
老人クラブ	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%	0 0.0%	1 0.3%	1 0.2%
地域での活動	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.1%	3 1.9%	5 1.5%	5 0.8%
複数回答	102 70.8%	82 77.4%	184 73.6%	126 69.6%	114 71.7%	240 70.6%	424 71.9%
返答なし	2 1.4%	1 0.9%	3 1.2%	3 1.7%	0 0.0%	3 0.9%	6 1.0%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 9-2 外出目的 (項目別)

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
外出していない	6名 4.2%	5名 4.7%	11名 4.4%	10名 5.5%	10名 6.3%	20名 5.9%	31名 5.3%
病院・医院への通院	96 66.7%	83 78.3%	179 71.6%	123 68.0%	120 75.5%	243 71.5%	422 71.5%
買い物	79 54.9%	71 67.0%	150 60.0%	87 48.1%	100 62.9%	187 55.0%	337 57.1%
畑作業	60 41.7%	31 29.2%	91 36.4%	61 33.7%	57 35.8%	118 34.7%	209 35.4%
散歩	52 36.1%	38 35.8%	90 36.0%	54 29.8%	50 31.4%	104 30.6%	194 32.9%
友人宅	34 23.6%	37 34.9%	71 28.4%	40 22.1%	48 30.2%	88 25.9%	159 26.9%
親類宅	32 22.2%	30 28.3%	62 24.8%	42 23.2%	31 19.5%	73 21.5%	135 22.9%
趣味・スポーツのため	27 18.8%	8 7.5%	35 14.0%	31 17.1%	15 9.4%	46 13.5%	81 13.7%
老人クラブ	12 8.3%	6 5.7%	18 7.2%	30 16.6%	24 15.1%	54 15.9%	72 12.2%
地域での活動	16 11.1%	8 7.5%	24 9.6%	22 12.2%	14 8.8%	36 10.6%	60 10.2%
仕事(通勤など)	16 11.1%	7 6.6%	23 9.2%	13 7.2%	4 2.5%	17 5.0%	40 6.8%
その他	3 2.1%	1 0.9%	4 1.6%	5 2.8%	6 3.8%	11 3.2%	15 2.5%
計	433 300.7%	325 306.6%	758 303.2%	518 286.2%	479 301.3%	997 293.2%	1755 297.5%

3) 外出手段

同じく外出頻度との関連で外出方法についてきくと、表 10-1 に示すように、「外出していない」は前期 1.6% に対し後期では 5.0% であった。表 10-1 に示すように単独回数で最も多かったのは「車を運転」で、前期 29.6%、後期 15.6% であった。これらの人々は車を運転する以外の方法では外出していないわけである。ちなみに「手帳非所持」群では「外出していない」は 1.0%、3.7% と少く、単独回答で「車を運転」は 33.5%、18.3% と僅かに多かった。

次に項目別の回答 (合計は 100% 以上) では表 10-2 に示すように、前期では「車を運転」が最も多く 44.4%、次に「家族の車」

33.2%、「歩いていく」25.2%、「自転車」13.6%、「タクシー」13.2% であった。

後期では「歩いていく」が最も多く 32.6%、次に「家族の車」31.8%、「車を運転」25.9%、「タクシー」24.4%、「公共交通機関(バス・電車)」13.5% であった。

「歩いていく」は前期 25.2% に対し後期 32.6%、「公共交通機関」は前期 8.0% 対後期 13.5%、「タクシー」も前期 13.2% 対後期 24.4% と後期で多かった。一方「車を運転」は前期 44.4% に対し、後期は 25.9%、「自転車」も前期 13.6% 対後期は 8.2% と前期で多かった。

なお「手帳非所持」群では「車を運転」は 52.8%、27.5%、「自転車」は 18.6%、13.5%

といずれもこの群よりやや多かった。

男女差でみると、「車を運転」は前期の男性 61.1%に対し、女性は 21.7%、後期で男性 45.3%対女性 3.8%、「自転車」の後期で男性 12.7%対女性は 3.1%、「バイク」は前期で男性 6.9%、女性 0.9%、後期で男性 11.6%対女性 3.8%と男性で多かった。

一方、「家族の車」は前期の男性が 22.9%に対し女性は 47.2%、後期で男性が 21.0%対女性 44.0%、「公共交通機関」は前期の男性 4.2%対女性 13.2%、後期で男性 6.1%対女性 22.0%、「タクシー」は前期男性 6.9%対女性

21.7%、後期で男性 21.5%に対し女性は 27.7%と女性で多かった。

これは単純化していえば、男性は自分で運転する人が多く、バイクもよく乗るが、女性は車に乗せてもらったり、公共交通機関（バス）やタクシーを利用したりする人が多いということになるが、例外が決して少なくないことに注意が必要である。すなわち女性でも運転する人がかなりあり、後期高齢者女性でバイクに乗っているも少なくないなどである。この点については「手帳非所持」群でも傾向はほぼ同様であった。

表 10-1 外出手段（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
外出していない	1名 0.7%	3名 2.8%	4名 1.6%	5名 2.8%	12名 7.5%	17名 5.0%	21名 3.6%
歩いていく	4 2.8%	5 4.7%	9 3.6%	7 3.9%	15 9.4%	22 6.5%	31 5.3%
車を運転	54 37.5%	20 18.9%	74 29.6%	48 26.5%	5 3.1%	53 15.6%	127 21.5%
家族の車	14 9.7%	27 25.5%	41 16.4%	14 7.7%	29 18.2%	43 12.6%	84 14.2%
公共交通機関（バス・電車）	0 0.0%	3 2.8%	3 1.2%	0 0.0%	6 3.8%	6 1.8%	9 1.5%
タクシー	3 2.1%	5 4.7%	8 3.2%	13 7.2%	10 6.3%	23 6.8%	31 5.3%
自転車	8 5.6%	4 3.8%	12 4.8%	3 1.7%	1 0.6%	4 1.2%	16 2.7%
バイク	4 2.8%	1 0.9%	5 2.0%	11 6.1%	3 1.9%	14 4.1%	19 3.2%
電動三輪車	1 0.7%	2 1.9%	3 1.2%	3 1.7%	3 1.9%	6 1.8%	9 1.5%
車いす	0 0.0%	1 0.9%	1 0.4%	0 0.0%	2 1.3%	2 0.6%	3 0.5%
その他	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	2 1.1%	2 1.3%	4 1.2%	5 0.8%
複数回答	51 35.4%	33 31.1%	84 33.6%	75 41.4%	69 43.4%	144 42.4%	228 38.6%
返答なし	3 2.1%	2 1.9%	5 2.0%	0 0.0%	2 1.3%	2 0.6%	7 1.2%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%